

心をつなぐ駄菓子屋

こぢんまりとした隠れ家のような店内に、所狭しと置かれた 100 種類以上の駄菓子。子供たちは小銭を握りしめ、放課後駄菓子屋に駆け込む。一つ一つのサイズが小さく値段も安いので、誰でも手軽に買えるのが日本の駄菓子だ。「うまい棒」に代表されるように数十種類もの味があるお菓子や、高額紙幣や iPhone を模したパッケージがデザインされているお菓子がある。子供が欲しくても手の届かないようなものも、駄菓子なら手に入れることができる。そんな子どもに夢を与える駄菓子屋に欠かせないのが、子どもたちを見守る「おばちゃん」だ。

神奈川県横浜市の大通りから少し奥に入った住宅街に駄菓子屋「おもちゃうえの」がある。この駄菓子屋を 40 年以上営んできたのは上野さんだ。上野さんは、高校生以下の子供からは消費税分を割り引くようにしている。それは以前 100 円玉を握りしめて駆け込んだ子どもが、消費税を払えず泣いてしまったことがあったためだ。

「消費税分のお金は私からのおこづかい」と上野さんはほほ笑む。子どもと積極的に関わり、いつもグループで来る子どもが 1 人で来た時には、「どうしたの？」と声をかける。また、万引きを見つけた時は、強くたしなめ子どもの反省を促す。

そんな上野さんの一番の楽しみは、子どもたちが成長していくのを見ること。昔小さかった子どもがいつのまにか父親や母親になっていて驚くこともあるそうだ。

「自分が小さい頃駄菓子屋に行くのが楽しみだったから息子も連れてきています」と近所の幼稚園からのお迎え帰りらしい母親は話す。男の子は上野さんと母親に見守られながら好きな駄菓子を買って、くじを楽しんで帰って行った。

コミュニケーションの場でもある駄菓子屋だが、後継者不足により近年は減少傾向にある。「おもちゃうえの」も上野さんが店に立てなくなれば閉めざるをえない。

そんな中、形を変えつつも駄菓子を楽しめる場所が都内にある。駄菓子バーと呼ばれる、ワンコインで駄菓子が思う存分楽しめる居酒屋だ。竹製のかごに盛られた駄菓子が店内のいたるところに置かれている。町にある駄菓子屋と同じように自分で好きなものを選び、席まで取ってくるシステムだ。内装は昭和レトロに統一され、照明も少し薄暗く抑えられたバーには、どこか懐かしい雰囲気が漂う。系列店は恵比寿や池袋にあり、そこで駄菓子をきっかけに子供の頃の思い出話を花を咲かせる人も多い。

駄菓子はただ「お菓子」としてだけではなく、日本人の心と心をつなげる役割も果たしているのかもしれない。

細江美月、中森葉月